



書道研究誌

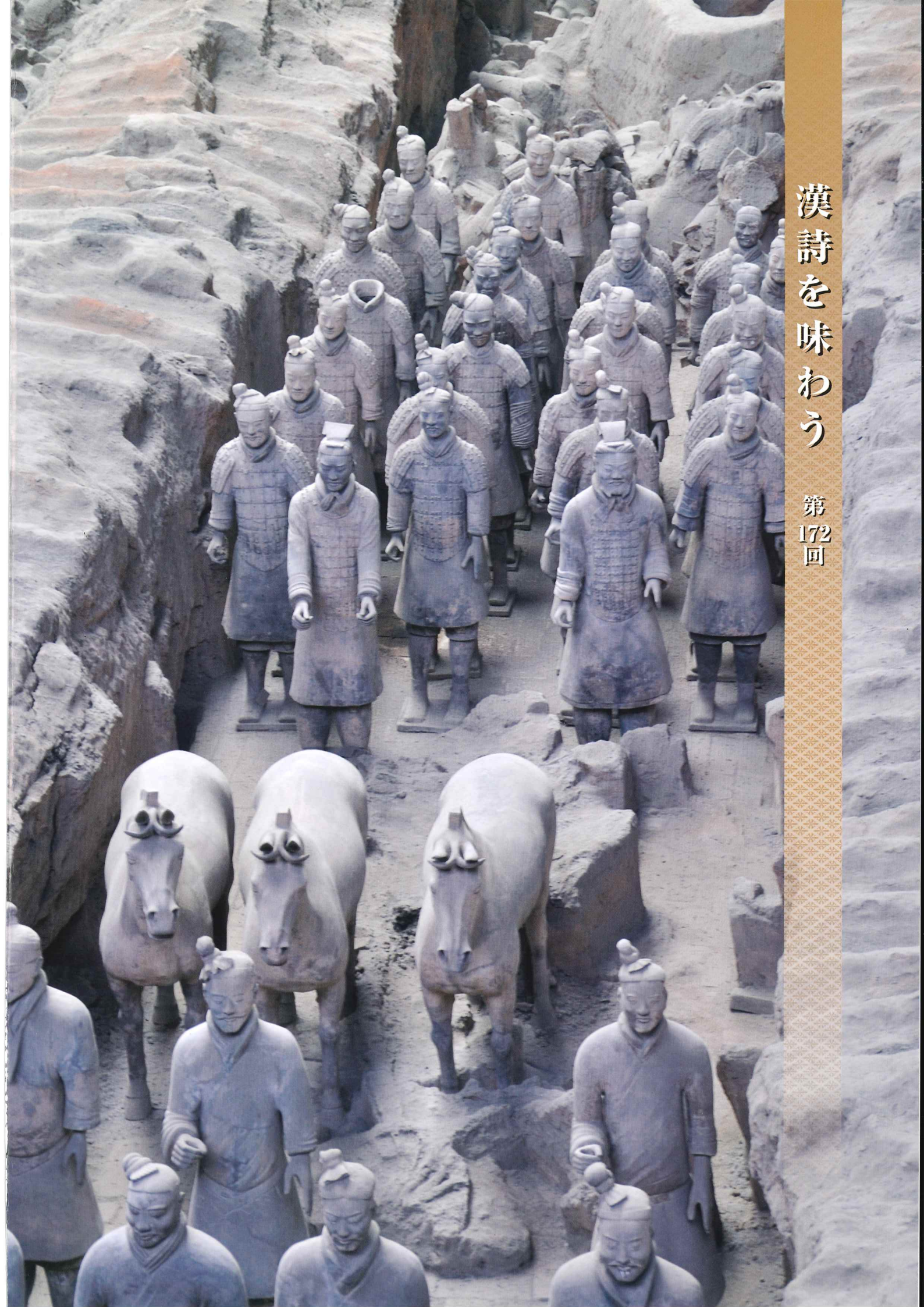
書の光

11
2023

Vol.663
宮城野書道会

漢詩を味わう

第172回



過秦始皇墓 しんしこうばをよぎる

王維

古墓成蒼嶺 こぼはそうれい 古墓は蒼嶺を成し

幽宮象紫台 ゆうきゅうしだい 幽宮は紫台を象る

星辰七曜隔 せいしんしちよう 星辰を七曜に隔て

河漢九泉開 かかんきゅうせん 河漢を九泉に開けり

有海人寧渡 うみひとなんど 海有れど人は寧ぞ渡らん

無春雁不迴 むしゅんえんふかえ 春無ければ雁は迴らず

更聞松韻切 しやういん 更に松韻の切なるを聞けば

疑是大夫哀 たいふ 疑わる 是れ大夫の哀しめるかと

始皇帝の墓の墳丘は山のように大きく

死者の宮殿は天の紫微宮をかたどっている。

星座を日月五星の間にちりばめ

銀河を冥土の地下に開いている。

海はあつても人はどうして渡れようか

四季がないので雁も帰る春の時期がない

松風のせつせつと鳴る音を聞けば

まるで五大夫の松が哀しんでいる声のようだ。

《古墓》 古い墓、始皇帝の陵墓を指す。

《蒼嶺》 青々とした大きな山。

《幽宮》 地下の幽冥界の死者の宮殿。

《紫台》 天の紫微宮。

《星辰七曜》 日月五星。太陽、月、五惑星をいう。

《河漢》 天の川。銀河。

《九泉》 泉は黄泉の泉で、冥土。

《五大夫》 松の異名。

古の人々の多くは、人生は一瞬のことで、人間は死んでから永遠の時間を冥土で送らなければならないと考えたのでしょうか。『史記』によれば、始皇帝は生前に三十七年かけて墓を造り、墓陵の天井には宝玉をはめこんで星座をかたどり、地下には水銀を流して江河大海をまねて人工の別世界をつくりました。そこには現実界の宝物や兵士や武器、そして動植物まで配したと伝えられます。

蒲州（山西省）で生まれた王維は、十五歳の秋に蒲州を發つて、科擧の勉強のため初めて長安に出ました。蒲州から長安に向かうその途中、秦の始皇帝陵に立ち寄って作ったのがこの詩です。

十五歳の王維は噂には聞いていた巨大な墳墓に驚きます。この世とまったく同じように地下の世界を造営しても、太陽が照らず四季もなく、広大な海でも人の絶えた死の海であり、生死を超える人間の限りない欲望の深さに、王維はなんともいえず暗く悲しく心がふるえます。そして、始皇帝が泰山で封禪の儀を行ったとき、雨宿りした松に五大夫の爵位を与えたという、その松風の音は深い哀愁のひびきに聞こえます。

この詩には「時に年十五」という題注があり、晩年になって自ら撰じた自分の詩文集に少年時代の詩として王維が特に残した詩です。前号でも触れましたが王維は自然詩人と言われ、その詩は見て感じたままに詩作して難解な言葉避けて平淡な表現が特徴です。

この詩は十五歳の作とは思えないほど内容は濃く、「礼記」「漢書」「文選」を典拠として語彙を選び、さらに古墓と幽宮、蒼嶺と紫台など対句法を駆使しています。この歳ですでに豊かな感受性とともな学問的な素養は備わっていて、そして何よりも人間の一生や生死についての深い想念をすでに持ち合わせています。

参考文献・漢詩体系（集英社）・漢詩の事典（大修館書店）

寒雪梅中に尽き 春風柳上に帰る 宮鶯嬌として酔わんと欲し 簷燕語つて還た飛ぶ

寒雪梅中盡春風柳上歸
宮鶯嬌欲醉簷燕語還飛

老い去るも又た逢う新歲月 春来りて更に有り好華枝 (陳猷章詩句)

(李白・宮中行樂詞)

老去又逢新歲月
春來更有好華枝

麗日初めて明らかに瑞氣開く (楊允孚詩句)

麗日初明瑞氣開

楊允孚詩句

歳首百事忘れ 天晴萬花喜ぶ (袁枚詩句)

長命先ず浮かぶ献寿の杯

歳首百事忘 長命先浮

天晴萬花喜 獻壽杯

袁枚詩句

『新春誌上展』 作品募集

- 応募資格 本会一般部会員はどなたでも応募できます。(一人各サイズ1点まで)
- 作品形態 A半切 (134×35cm)・B半切1/2 (67×35cm)
・C半切1/4 (67×17.5cm) (33.5×35cm) 各サイズとも縦横自由
- 作品内容 漢字部・かな部・調和体部。臨書作品も推奨します。
※10月号掲載の出品票をコピーし、支部段級氏名及び作品の釈文を記入して作品下部左側に貼付してください。
※作品には必ず落款を入れ、雅号印をお持ちの方は押してください。
※臨書作品は落款を臨とし、古典名と釈文を出品票に記入してください。
- 締め切り 令和5年11月30日(木) 必着
- 出品料 A半切……3,300円・B半切1/2……2,200円・C半切1/4……1,650円

未 朝
 曙 梵 林
 林

読み

朝梵林

未だ

曙あけず

(朝の

読経は

林が

まだ

明け

きらぬ

清々

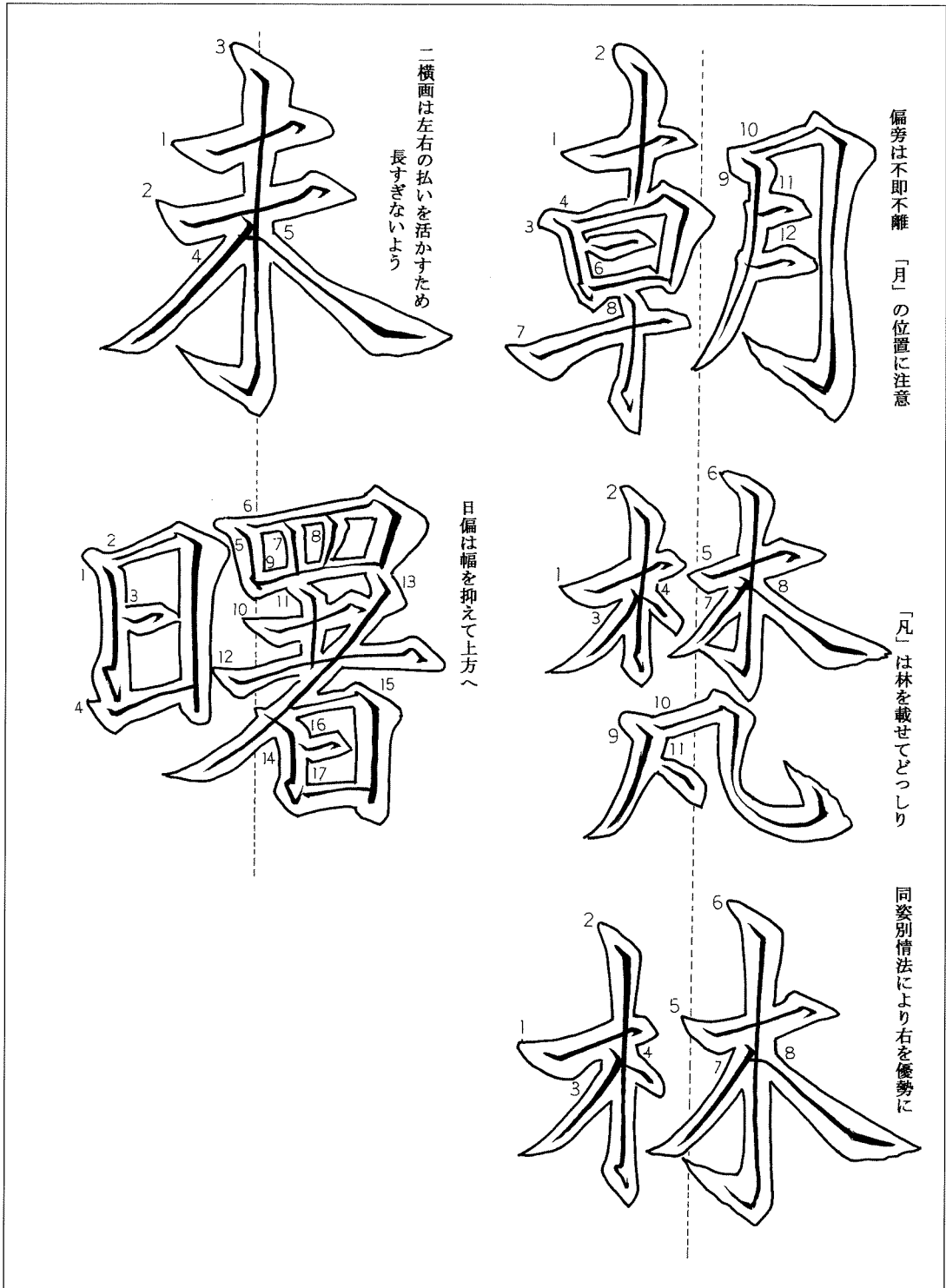
しいう

ちにお

こな

われ)

佐藤象雲書



二横画は左右の払いを活かすため
長すぎないよう

偏旁は不即不離 「月」の位置に注意

日偏は幅を抑えて上方へ

「凡」は林を載せてどつしり

同姿別情法により右を優勢に

一般部規定課題出品について
規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世事問樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

澗芳襲人衣

澗芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歷

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

未	朝
曙	梵
林	林

次号課題

隸書

更	夜	未	朝
寂	禪	曙	梵
	山		林

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

石門頌 尤も艱なり

象雲臨

■ 石門頌 (後漢・西暦一四八年) の臨書 (10)



「尤も艱なり」
「尤も艱なり」

『尤も艱なり』

西安から成都の間には険峻な秦嶺山脈が東西に横たわっていて、古くから交通の難所でした。漢代になって三つのルートが開かれ、その一つが褒斜道で、その開通に功績のあった楊孟文を称えて石の刻したのがこの石門頌です。それまでの子午道などが、「隔絶してとりわけ険しかった」というのが今回の文意です。

漢隸には字肌の美しいものと粗硬なものがありますが、古隸から八分隸に推移するに従って優美になる傾向があります。石門頌は律動性が豊富で、摩崖碑というところもあり字肌は粗に見え素朴な印象を受けます。また一般には漢隸は線が茂密なものが多く重厚な感じを持ちますが、石門頌は俊抜ですが、重厚感はありません。全体的に均整な割に部分的には自由性が豊富で、磊落さや飄逸な感じがあります。

今月の「尤」がまさに飄逸感があります。碑面が粗いため、数種の拓を比較してみました。どこまでが実際の線か判別できません。字典をみると新書源(二玄社)では、右上部の線は省かれていて、書道大字典(角川書店)では、左右とも長いまま掲載されています。また後世の摹刻碑では、右側上部を長くして、今回はこれを採用しています。小篆の筆意があり面白い結体です。今月は半紙横使いです。

比其清華

(松風水月も未だ) 其の清華を比するに (足らず)

比其清華

象雲臨

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (24)

『比其清華』

王羲之の代表的行書作品である「蘭亭序」と「喪乱帖」では全く風趣が異なり、行書体と一口に言っても相当な幅があります。そのなかで集字聖教序に集められた王羲之の字は、王羲之の中庸を得ている字を選んでいるように見えます。初唐の太宗時代に神格化された書聖王羲之の字は、書の規範であり、定型としての役割を担っていたことは確かです。いわば書を学ぶ万人のためのテキストとして性格が付与されています。

今月の「比其清華」の四文字も非常に行書として中庸を得て素晴らしい結体ですが、何となく物足りないのは、王羲之の字の寄せ集めであり、行書の生命である連続性やリズムが欠如しているためです。そう考えると、集字聖教序の臨書は形臨ではデッサン的な訓練に過ぎず、今回は形は原帖から離れることを覚悟して文字間の繋がりを大切にして臨みました。